

算命学中庸

【初年】 24 回目

24 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【二十四節気七十二候】

【初年】 24 回目 【二十四節気七十二候】 01

にじゅうしせつきしちじゅうにこう こよみ
二十四節気七十二候は暦のことです。

中国では、古くからつかわれていた暦です。

1 年を 12 ヶ月に分けます。

これが十二支のもとになっているのです。

1 年 12 ヶ月 (十二支)



2 つに分けます

1年12ヶ月を2つに分けました



さらに2つずつにわけると。

つまり、ひと月（一ヶ月）を前半と後半に分割したのです。

（子月＝ひと月）（丑月＝ひと月）（寅月＝ひと月）という十二支の（ひと月）を、子月であれば（前半の子月）と（後半の子月）というように、一つの月を（前半）（後半）に分けたのです。

二十四節気はおよそ15日ごと

二十四節気はおよそ15日ごと

正月節〔立春〕

正月中〔雨水〕

二月節〔啓蟄〕

二月中〔春分〕

そうしますと、1年を24に分けられることとなります。

これが24節気です。「節季」は「節」ともいい、その季節を表す。

一年の各月を2つに分けた



24節気

にじゅうしせっき

一ヶ月を二つに分けたので、一つの節気は15日位です。

（ひと月の30日を二つに分けましたので、一つの節気が15日位）

その15日の節気が、1年のなかに24あるわけなんです。

1年間を24に分けました。そして➡

☞ 「節季^{せつき}」を「節^{せつ}」ともいい、その季節を表します。

にじゅうしせつき
二十四節季は、「節^{せつ}」と「中^{ちゅう}」が交互に繰り返されます。

春は〔立春^{りっしゅん}〕から始まり、〔立春^{りっしゅん}・啓蟄^{けいちつ}・清明^{せいめい}〕が「節」です。

そのあとにある〔雨水^{うすい}・春分^{しゅんぶん}・穀雨^{こくう}〕が「中」です。

ます。夏は〔立夏^{りっか}〕から始まり、秋は〔立秋^{りっしゅう}〕から始まります。

	節	中	節	中	節	中
春 ⇒	〔01 立春〕	〔02 雨水〕	〔03 啓蟄〕	〔04 春分〕	〔05 清明〕	〔06 穀雨〕
夏 ⇒	〔07 立夏〕	〔08 小満〕	〔09 芒種〕	〔10 夏至〕	〔11 小暑〕	〔12 大暑〕
秋 ⇒	〔13 立秋〕	〔14 処暑〕	〔15 白露〕	〔16 秋分〕	〔17 寒露〕	〔18 霜降〕
冬 ⇒	〔19 立冬〕	〔20 小雪〕	〔21 大雪〕	〔22 冬至〕	〔23 小寒〕	〔24 大寒〕

二十四節気

節と中が交互に並びます

正月節〔立春〕	正月中〔雨水〕	二月節〔啓蟄〕	二月中〔春分〕
三月節〔清明〕	三月中〔穀雨〕	四月節〔立夏〕	四月中〔小満〕
五月節〔芒種〕	五月中〔夏至〕	六月節〔小暑〕	六月中〔大暑〕
七月節〔立秋〕	七月中〔処暑〕	八月節〔白露〕	八月中〔秋分〕
九月節〔寒露〕	九月中〔霜降〕	十月節〔立冬〕	十月中〔小雪〕
十一月節〔大雪〕	十一月中〔冬至〕		
十二月節〔小寒〕	十二月中〔大寒〕		

〔たとえば〕〔処暑〕は「中^{ちゅう} = 中気^{ちゅうき}」です。『月』を決めるものであり、〔処暑〕が含まれる月は、旧暦の『七月』を意味します。

二十四節気のように、1年を二十四の節に分けました。

その一つの節を、さらに細かく【3つ】に分けました。

〔立春〕であれば

- 一候（立春・初候）2/4～2/8 頃
- 二候（立春・次候）2/9～2/13 頃
- 三候（立春・末候）2/14～2/18 頃

〔雨水〕であれば

- 四候（雨水・初候）2/19～2/23 頃
- 五候（雨水・次候）2/24～2/28 頃
- 六候（雨水・末候）3/1～3/4 頃

〔啓蟄〕であれば

- 七候（啓蟄・初候）3/5～3/9 頃
- 八候（啓蟄・次候）3/10～3/14 頃
- 九候（啓蟄・末候）3/15～3/19 頃

〔春分〕であれば

- 十候（春分・初候）3/20～3/24 頃
- 十一候（春分・次候）3/25～3/29 頃
- 十二候（春分・末候）3/30～4/3 頃



七十二候 しちじゅうにこう

そうしますと、最終的に1年は72に分けられることになります。それが 七十二候 (しちじゅうにこう) です。

1年12ヶ月の時期に分けたら、1つの月が約30日です。

30日を2つずつに分けた。24節気の一つが15日位。

その15日間を、さらに3つに分けたから5日。

最終的に1年を5日毎に区分しました。

1年間を細かく72の区分に分類して、季節の移り変わりをこまかく丹念たんねんに観察して、自然界の変化の過程から、さまざまな自然の法則を学び取り、暦こよみに取り入れたのです。

☞ 「二十四節気七十二候」は、直接、占いに用いるものではありません。

七十二候を直接、占いに用いるものではないのですが、

〔たとえば〕春になると、どういう現象が起きるのか、季節が夏へと移行して、夏が来る前に、まずはこういうことが起こって、それから夏が巡って来るとか――。

冬が来る場合も、雪が降る前には、必ずこういう現象が起きるとか、そういう自然の移り変わりを詳しく観察して、それを占いの観方に応用したのです。

ここでは「二十四節気七十二候」があるということを知っておいて頂ければよろしいです。

⇒ 現在私たちが用いている「太陽暦〔新暦〕」1872年（明5年）に採用された暦です。

それ以前に用いられていた暦は『太陰太陽暦』^{こよみ たいいんたいようれき}といいまして、月の欠けを主な基準とした暦^{こよみ}（旧暦）です。

⇒ 旧正月は『太陰太陽暦』^{たいいんたいようれき}つまり旧暦の1月1日のことです。

「立春」は〔旧暦の1月1日〕ではないのです。

「立春」は二十四節気で決められた日付「新暦の2月4日ごろ」を「新年の春の始まり」とするのです。

⇒ 1年は「立春」から始まります。

現代のカレンダーでいえば、「立春は2/4から2/5頃」です。

2020年2月4日は「二十四節気」の正月節・立春です。

二十四節気はおよそ15日ごと

二十四節気はおよそ15日ごと

正月節〔立春〕 正月中〔雨水〕 二月節〔啓蟄〕 二月中〔春分〕

〔立春〕は「二十四節気」の一番目に来る節気^{せつき}です。

⇒ **七十二候** について :

🔍 参照 ⇒ ^{しちじゅうにこう}七十二候 【二十四節気七十二候】 04

「二十四節気」の『節』を3つに分けて ⇒ 24 節 × 3 候 = 72 候

^{いっこう}一候 (初候) ・ ^{しょこう}二候 ・ ^{にこう}三候 ^{さんこう} — ^{しちじゅうにこう}七十二候といます。

一候 (立春・初候) 2/4 から 2/8 頃

一候 (初候) ⇒ 東風解凍 (こちこおりをとく) 東の春風が氷を溶かし始める

毎年、立春の時期になると、東から風が吹いて来ました。

それまではほとんど北風が吹いていたのに、立春にはいると、

ようやく東から風が吹くようになる。

実際にそういう現象が起こりました。

ただし、この二十四節気七十二候というのは、中国での話なので、

日本の自然の移り変わりと比べれば、少しずれている部分がある

かも知れませんね。

二候 (立春・次候) 2/9 ~ 2/13 頃

二候 ⇒ 黄鶯睨睨 (うぐいすなく) 鶯が山里で鳴き始める

立春から 5 日位経つと、二候に入るわけです。

二候の時期になると、山中の鶯が鳴き始める時期になったという

ことです。

三候（立春・末候）2/14～2/18頃

三候 ⇒ 魚上氷（うおこおりをいずる）割れた氷のあいだから魚が飛び出る

三候の時期になってくると、氷の近くに魚が上がってくる。

それまでは川も湖も凍っていて、魚が見えなかったのに、氷が薄くなってきて魚が見えるようになる。

……というふうに、1年間を最終的には5日毎に分けて、自然の移り変わりを観察して暦こよみにしたわけです。

⇒ 「二十四節気」—— 説明を加えます。

正月節〔立春^{りっしゅん}〕「春が始まる」2/4頃1年が始まります。

春

春という字は、このように書きますけど、この春の上の部分は、土のなかから、植物が芽を出そうとしている姿を文字にした象形文字だそうです。

三 ⇒ 大地を表わしています。

日 ⇒ 太陽を表わしています。

春になると太陽が暖かくなり始め、土のなかから植物が芽を出そうとしますよ。その姿が春という文字ということです。

正月中〔雨水^{うすい}〕2/18~19頃から

雨水は〔あまみず〕と書きます。雨が降り始める時期です。

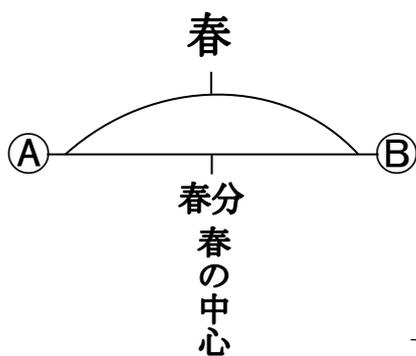
それまでは雪ばかり降っていたのに、2月の18/19日位になると雨が降り始めます。それで雨水という名称になったそうです。

二月節〔啓蟄 けいちつ〕3/5~6頃から

啓蟄の啓は「閉ざしているものをあけひろげる」という意味があり、蟄は「かくれる・もぐる」つまり、もぐっていたものが地上に出てくるという意味です。土のなかで冬眠していた動物が目覚めて、地上に出てきますよ。ということです。

二月中〔春分 しゅんぶん〕3/20~21頃から

春分というのは「ここは春の中心」という意味です。



春分の日は、

昼の長さとお夜の長さがおなじです。

太陽の力が1年で最も平均しています。

それで、春の中心として「春分」と名付けたわけです。

春は立春から始まって3ヶ月位あるわけですが、

春という季節がAからBまでであるとすれば、その中心、春のちょうど真ん中に春分がきます。

春分の日が来るように、暦は設定されているわけですが、春のど真ん中なので「春を前半と後半とに分ける日」と、いう意味で春分と名付けられました。

三月節〔清明 せいめい〕 4/4~5 頃から

清明は〔清い・明るい〕と書きますが、草木の花が咲き始め天恍
4/5 頃になると、晴れて明るい陽気となってきますよ。

三月中〔穀雨 こくう〕 4/20~21 頃から

穀雨は〔穀物の雨〕と書きます。これもその通りで、作物を育て
るのに必要な春の雨が降る時期という意味です。

四月節〔立夏 りっか〕 5/5~6 頃から

この年はじめて、太陽が照りつけ、草木が生い茂る暑い季節を感
じる時期の意味です。

草木が生い茂る暑い季節

四月中〔小満 しょうまん〕 5/21~22 頃から

小さな満足という意味があります。春に蒔いた種に芽が出始め、
一定の大きさに育ってきます。収穫はまだまだ先ですが、何とか
実りまでいけそうだ——という小さな満足感の意味で名付けら
れたそうです。大きな満足まではいかないけど、収穫の見通しが
ついたということです。

五月節〔芒種 ぼうしゅ〕 6/5~6頃から

芒種は、稲や麦の穂先にある硬い^{かた}とげのような毛をもつ^{こくもつ}穀物の種という意味です。つまり、麦や稲を植える時期の意味です。

日本では、特に芒種は梅雨入りの時期に当たります。

五月中〔夏至 しげし〕 6/21~22頃から

夏至については前にも出てきました。夏至は「夏が中心に至る」という意味で、夏至（夏が至る）と名付けられたので、夏が至ると書きます。1年のなかで、昼が最も長い日です。

中国の昔の書物に「淮南子 ^{えなんじ}」という思想書があります。

淮南子は書物の名前です。

そのなかに、夏至と冬至についての記述があります。

夏至⇒乗陽「極陽」陰気によって万物は死滅へ向かう

冬至⇒乗陰「極陰」容器を仰いで万物は生生へ向かう。

要点を書きますと――

夏の日至ればすなわち陰は陽に乗る

冬の日至ればすなわち陽は陰に乗る

夏至には陽気極まって陰気萌（きざ）し

冬至には陰気極まって陽気萌（きざ）す

☞ 算命学は、これらを一言で表しますと、つぎのような考え方になります。

「陽極まれば陰となる」

「陰極まれば陽となる」

一言でいえば、陰極まれば陽となる。

「夏の日至ればすなわち陽は陰にのる」

つまり、陰が乗っかって来るといっています。

「夏至には、陽気極まって陰気萌し」 どういう意味かといえ、夏至は1年のなかで昼が一番長い日です。

でも、1年で昼が一番長い日ということは、もうそれ以上は長くないということです。それゆえに、逆に——夏至の日から、日が縮み始めることになります。

太陽、陽の気が衰え始めると、陰の気が始まりますよ。

夏至は、一見、昼が1番長くて陽の気が極めて強いように見えるけど、1番昼が長いということは、もうそれ以上に、昼は長くなりませんので、夏至からは日が縮み始めます。

夏至が来ると、陰気が出始めますよ。という意味合いです。

夏至と反対に—— 冬至は昼が一番短い日です。

冬で寒いし、陰の気が強いけれども、1年で一番昼が短いということは、もう、それ以上は短くなりません。

ですから、冬至から日が伸び始めるわけです。

つまり、陽気が出始めます。ということです。

1番寒くて、1番太陽のチカラが弱い、1番昼が短い、その冬至が来たら、もうそれ以上に弱くならない、寒くならないわけですから、そこから陽の気が始まりますよ。そういう意味です。

算命学では、これを一言で「陰極まれば陽となる」と、いいます。この考え方は運勢を観るときに用います。

運勢は、すごく順調に昇っていく時期がありますが、頂点に達したら、後は下り坂というふうに見ます。

「この^{あたり}辺が、この人の運勢の頂点だな」そういう観方が出来るようになっていきます。

山に登って頂上まで来たら、あとは下りるしかないわけです。

谷底まで落ちれば、あとは昇るしかありません。

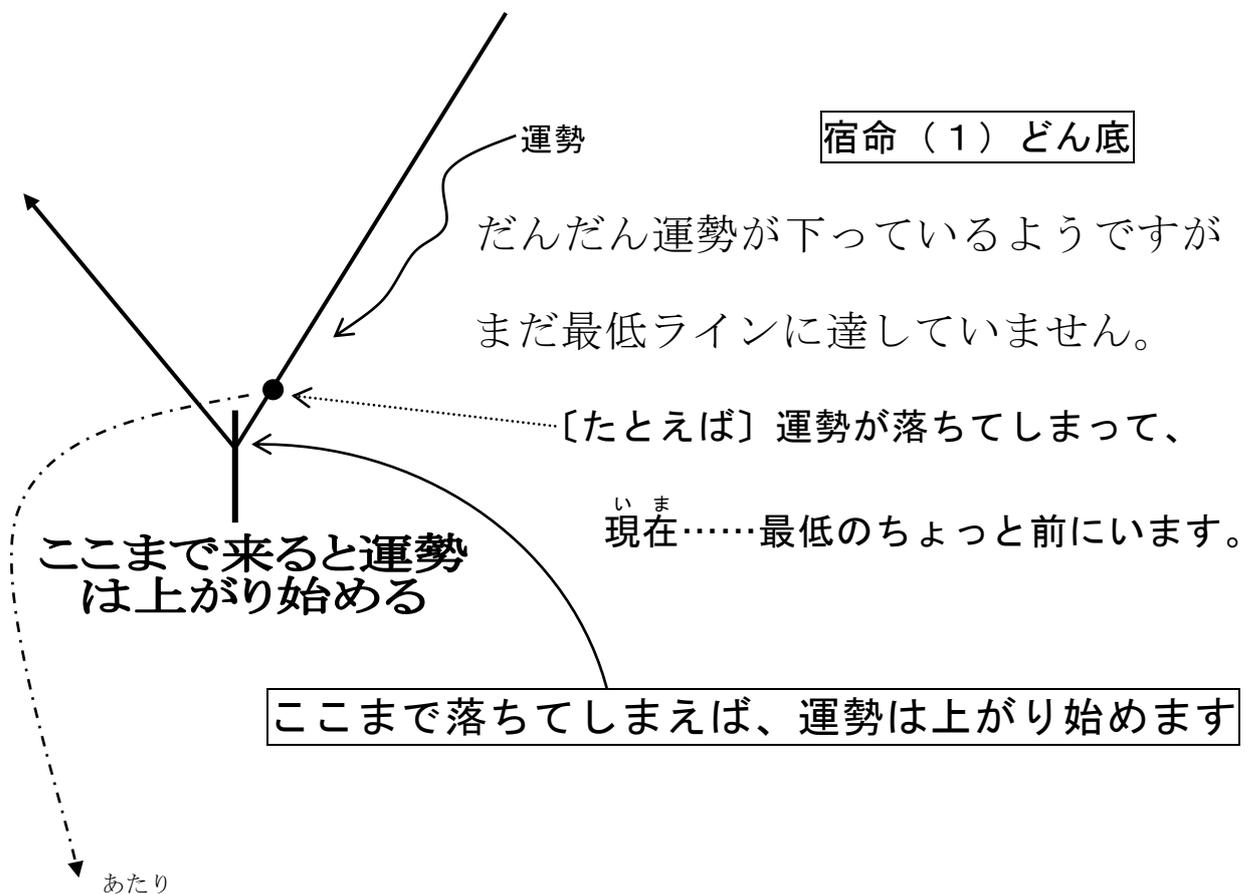
「この人は現在が^{いま}絶頂期だな——」絶頂期だとすれば、もうそれ以上は伸びません。ということになります。後は下り坂です。

運勢はそういう仕組みになっていると考えているのです。

それゆえに、運が落ち込むときも、最低まで落ち込んだら、もうそれ以上は落ち込みません。

どん底まで落ち込んだら、後は、逆に、運勢が回復し始めます。

⇒ 日本国のどん底は、東日本大震災が相当するわけです。



この辺にいるとき (どん底に落ちる少し前) ……人はふつう
どのように対処しますか？

【たとえば】 商売が落ちてきちゃって、現在はこの辺にいたりか、
あるいは、健康でも大分体調が悪くなってしまったり、ここまで落
ちて来たとか、夫婦仲が大分悪くなってきちゃっているとかの

場合……普通どうしますか??

この^{あたり}辺にいるとき……なんとかこれ以上に落ちないように、努力することが多くないですか、いかがですか。

この辺にいる場合に、これ以上落ちないように頑張ってしまうと、いつまでたっても運勢は回復しません。

すべてとは言い切れませんが、占いのうえでも——

現在、この^{あたり}辺にいるときは、いっそ“どん底まで落ちてしまいなさい”ここまで落としちゃえば、後は、上がり始めます。回復しますよ。

そういう答えが出ることがあります。

宿命(1)どん底のように、普通の思考としては——ここまで悪くなっちゃったから [もうこれ以下に落ちたら大変だ] として踏みとどまろうとします。

あそこで踏みとどまると、いつまでたっても上がり始めないのです。

こういう状況のときは、いっそのこと、底辺まで落ちたほうが、あとは、すんなり上がって行ける、ということはいくつもあります。

・病気のとき、いっそ病気で倒れたほうが、その後、完全に回復することがあります。

具合が悪いのに、無理して一所懸命に薬を飲んで、何とか体をごまかして、これ以上悪くならないように、悪くならないように、踏みとどまろうとすると、いつまでたっても、その病気は治らないのです。

いっそ病気で倒れちゃって、ちゃんと入院して、完全に治療したほうが、本当に健康を取り戻せますよ。そういうことはあるはずです。

・夫婦の場合、大分夫婦仲が悪くなってきたとします。夫婦仲が悪くて、うちはもう離婚寸前だということで、もうこれ以上悪くならないように、お互いに気を遣ってなんとか夫婦仲を維持しようとする、いつまでたっても回復しないのです。

いっそのこと大喧嘩しちゃえば、“雨降って地固まる”の譬^{たと}えのように、かえって仲直りできることがあります。

・親子でも、兄弟でも、そういうことはよくあります。親子の仲がまずくなってきた、まずくなってきたから、

お互いに気をつかって、これ以上悪くならないようにと踏みとどまろうとすればするほど、いつまでたっても、仲直りできません。

いっそのこと、思いっきり仲を壊しちゃう、そのほうが大喧嘩しちゃったほうが、それをきっかけに、お互い、仲直りできる、あるいは、立ち直れる。そういうことはあるのです。

そういうときには、**宿命(1)どん底**のように、谷底へ落ちてしまうことを、占いのうえで勧めたりもします。

☞ しかし——ご夫婦の場合なら、お二方の宿命を加えて判断しますよ。

お子さんがいる場合はお子さんの宿命も加えます。

親が離婚しても、動じないお子さんもいます。親が離婚しては困るお子さんもいます。さまざまです。

ただ、「陰極まれば陽となる」「陽極まれば陰となる」ということでいえば、陰極まれば陽になるわけですから、陰に極まらないで、陰の手前〔どん底まで落ちない手前〕に

〔たとえば〕「チャゲ&アスカ」のアスカさんの場合は、妻の洋子さんが警察に内通したと報道されていますが、彼は結果的に底辺まで落ちたわけです。

アスカさんは逮捕された機会に、覚醒剤を止めないと、完全な中毒になってしまいます。

彼の演奏パフォーマンスと音楽は、人体図の水火の激突ですが、運勢的に頂点は過ぎています。

関係者の支援で、たとえ復帰できたとしても、以前のようにはならないわけです。

妻の洋子さんは、芯の強い女性ですけど自己中です。

アスカさんが覚醒剤に走るには、それなりの理由があるわけです。

鬼谷子の「原因なくして、結果はない」ということです。

六月節〔小暑 しょうしょ〕 7/7~8 頃から

小暑は、小さい・暑い、と書きますが、ここは梅雨が明けて、暑さの厳しい時期になります。

六月中〔大暑 たいしょ〕 7/22~23 頃から

大いに暑い、と書きますように、ここは1年で最も暑さの厳しい時期です。7/22位から始まるわけです。

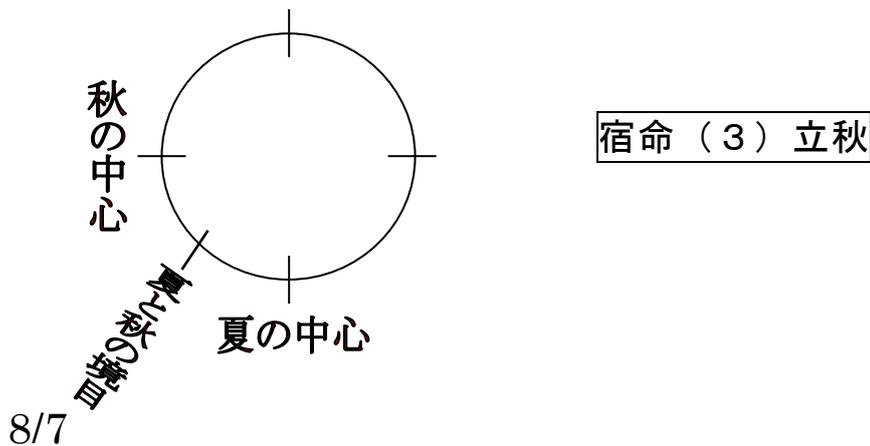
現在でも、この時期に暑中見舞いを出したりしますけど、大暑を過ぎると、七月節〔立秋〕になります。

七月節〔立秋 りっしゅう〕 8/7~8 頃から

立秋に入ると、秋の気配を感じるようになってきます。

「秋の始まり」という意味です。

この日付の決め方としては、図に描いてみます。



【初年】 7 回目【十二支の成立】のところでやりましたように、

「夏至は夏の中心」で「秋分の日は秋の中心」であったわけです。

夏至は太陽が最強になるところなので、そこを夏の中心に定めたわけです。夏至は、昼が一番長い日です。

ところが『秋分の日は、昼と夜の長さがおなじ』です。

それゆえに、太陽のチカラがちょうど 1 年で平均している日だと、いうことで、ここを秋の中心と決めました。

夏の中心と、秋の中心から見て、ちょうど度真ん中にぶつかる所が、夏と秋の境目だとしたわけです。

夏至から数えて、あるいは秋分から数えて——ちょうど

真ん中に来る所が『夏と秋の境目』です。

これは、日付でやっていくと、だいたい **8/7** です。

8/7 は立秋で、秋はここから始まります。と、日付を定めたわけです。

毎年、夏至が何日になるのか、秋分の日が何日になるのか、これは閏年がきたり、太陽暦の日付でいくと、年によっては1日位ずれることがあります。ゆえに立秋の日も1日位ずれて来ることがあるわけです。

ここにもう一つの考え方が入ってしまして、大暑は 7/23 から始まる〔15日間位の期間〕をさします。

これは最も暑い日です。立秋は 8/7 から始まります。

実際この当たりの時期というのは、1年のなかで一番暑い時期でしょう。

それなのに——なぜ、ここで〔立秋〕というのかです。

先ほどの太陽を観測した日付とは別に、大暑のところが最も暑くて、その最も暑い時期を過ぎると、今度は涼しくなり始めるわけです。

最も暑いということは、もうそれ以上暑くなりませんよ。

ということでもあります。

最も暑い時期を過ぎたのだから〔立秋からは、涼しくなり始めます〕という意味合いで、ここを〔立秋〕というふうにしたわけです。

このような考え方も含まれています。

お天気予報などで、「今日は8/7で立秋です。暦の上では今日から秋ですけど、まだまだ暑さの厳しい日が続いています」とか、「今日は立秋ですけど、真夏日になりました」とか……アナウンサーがいたりします。

つまり、〔立秋〕は、涼しいから秋ということではないのです。

「立秋から、涼しくなり始めるので、秋なのです」という考え方をしているわけです。

言い換えれば、一番暑いから立秋ということですよ。

一番暑いということは、それ以上は暑くならないということですから、陽極まって陰となる涼しさが出始めるわけです。

立秋からどんどん涼しくなって来るのです。

そういう意味が〔立秋〕には含まれています。

そして、秋という字はこのように書きますけど、「禾^{のぎ}」のよこに「火^ひ」と書きます。

ノギヘンは作物を意味します。



禾 ⇒ 作物（主として、稲などの穀物です）

火 ⇒ 太陽（太陽をさしています）

秋は作物が太陽を浴びて熟します。実ります。

作物が熟す ゆえに「秋は実りの秋」といわれています。

昔から、秋というのはこのような時期ですよ。といっているわけです。

ようやく作物が、太陽の光を浴びて熟します。ということから、秋という文字が生れたそうです。

七月中〔処暑 しょしょ〕8/23~24頃から

処暑というのは字の通りで、暑さがとどまる時期という意味です。

秋になったけど、まだ暑さが峠に留まっています。

その暑さも、ここから峠を越えて行きます。

八月節〔白露 はくろ・しらつゆ〕 9/7~8 頃から

白露も字のごとくで、白い露（つゆ）が降り始める時期という意味です。

9/8頃になると、大気も冷えてきて、ようやく露が見られ始めるわけです。

八月中〔秋分 しゅうぶん〕 9/23~24 頃から

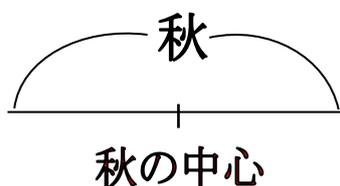
秋分は秋の中心です。と記しましたように、秋の中心です。

秋分 ⇒ 秋の中心

秋は3ヶ月位ありますが、ちょうど真ん中のところが秋分です。

秋を分けるという意味で、〔春分〕とおなじです。

秋の真ん中なので、秋を前半と後半とに二分している、分けている日です。ということで、秋分と名付けられました。



秋分は、もともと〔秋の中心〕という意味なのです。

九月節〔寒露 かんろ〕 10/8~9 頃から

寒露も字のとおりで、露(つゆ)が冷たくなる時期です。

10/8 頃になってくると、露も冷えて、寒くなってきます。という意味です。

九月中〔霜降 そうこう〕 10/23~24 頃から

霜降は霜が降り始めるという意味です。

露(つゆ)ではなくて、霜(しも)となって降り始める頃です。

十月節〔立冬 りっとう〕 11/7~8 から

立冬 ⇒ ここから冬が始まります。

冬

冬という字の上の部分は、作物を吊しておく姿を意味しているそうです。

秋に刈り入れをした穀物を、冬の間はぶら下げておくのでしょう。

十月中〔小雪 しょうせつ〕 11/22~23 頃から

小さな雪です。雪がちらちらと舞い始めるという意味です。

十一月節〔大雪 だいせつ〕 12/7~8 頃から

大きな雪、雪が激しく降ってくるという意味です。

十一月中〔冬至 とうじ〕 12/21~22 頃から

冬至は冬の中心「冬が頂点に至る日」です。

1年中で昼が1番短い日で、夜が最も長い日です。

日照時間が1番短く、日差しも弱い、太陽のチカラが1年で最弱になる場所です。

それゆえに、ここを冬の中心と決めました。

冬という季節は、太陽のチカラが弱くなり、寒くなって冬になるわけですから、冬の中心だといえます。

立秋のところとおなじ考え方です。

太陽のチカラが最弱になるということは、もうそれより弱くなりません。ということですから、逆に——冬至からは、太陽が強くなり始めるわけです。



ここから太陽のチカラは強くなり始める

それゆえに、陽の気「陽気」が生まれるところである。

と考えています。

自然界において、冬至のところはまだまだ寒いのですが、実質ここで陽の気が生まれています。

ここから「陽気」が生まれるということで、冬至は毎年、子月にあります。

それで、十二支の1番始めは（子）になっているのです。

「万物の気はここから動き始めますよ」ということで、十二支の最初が（子）となったわけです。

十二月節〔小寒 しょうかん〕 1/5~6 頃から

小寒はいわゆる寒の入りです。

小寒 ⇒ 寒の入り

とても寒くなってきました。

本格的な冬に到来です。

十二月中〔大寒 だいかん〕 1/20~21 頃から

最も寒いが厳しい時期に入ります。

この厳しい寒さが過ぎると、また〔立春〕がめぐってきます。

最も寒い時期を過ぎると、立春にもどって春のはじまり

です。暖かくなり始めるわけです。

「陰極まれば陽」となります。

「二十四節気」はここまでです。

自然界の1年のなかに、春夏秋冬の移ろう姿があります。

その変化の様相ようそうを参考にして、「運勢の法則」のようなものが形成されていったのです。

その元になったひとつが「二十四節気」でもあるのです。

⇒ 「二十四節気七十二候」を直接占いにつかうわけではないのですが、自然の摂理から運勢のうごきを学んだわけです。自然界の移ろいが、占いの考え方に取り入れられているのです。

〔たとえば〕冬至は子月の位置にあります。冬至を境に、冬至の日から「陽気」が生まれます。そうしますと、宿命を見たときに、子月に生まれた人でも〔冬至より前の日にちに生まれた人〕と〔冬至の後の日にちに生まれた人〕では、陽気を浴びたのか、陽気を浴びていないのかで、運勢に違いがでてきます。

「二十四節気」の移ろう姿は、占いをするうえで、基になっているひとつであると、おもって頂ければよろしいです。

【初年】 24回目授業【二十四節気七十二候】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 25回目【自然と生活】